

矛盾だらけのフェル ミ・ハート

闇鴉慎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私は生まれてから17年、この灰白色の岩石惑星でたったひとり暮らししてきた。ずっとひとりだったから、孤独なんて概念自体、私には縁遠いものであるはずだった。

なのに私は、ある日みつけてしまった。

外宇宙から飛来した謎の天体——そこに瞬く光言語の痕跡を。

17年ぶんの孤独が私を突き動かす。

私もあなたと、おしゃべりがしてみたい。

“ヤドリギ魔法堂” シリーズ第4弾。壮大な舞台上でミニマムな少女の葛藤を描く、コ

ズミツク・ファンタジー・青春物語。

目次

0 1.	孤独惑星、17歳	1
0 2.	初めてのおしやべり	8
0 3.	仲裁者	20
0 4.	アローン・イン・ザ・ダーク	30
0 5.	漆黒の重力井戸	41
0 6.	マリカーやろうぜ	52
0 7.	矛盾だらけのフェルミ・ハート	60

0 1. 孤独惑星、17歳

物心ついたときには既にひとりぼっちだったから、孤独という概念自体、私には縁遠いものであるはずだった。自然の観察と論理的思考なんてのが、そもそも問題の始まりだったのだ。

私はこの星で生まれた。私以外には砂とクレーターしかない、この世界で。

どうして私が生まれたのか、なぜここにいるのか、そのメカニズムや由来について考え耽った時期もある。というか今こうして操っている言語の大半は、その思考の補助とすべく考案したものだ。しかし幼少期から多大な時間と労力を費やしたわりに成果はほとんど得られなかった。私の存在——仕組み、謎。来歴、謎。理由だつてももちろん謎——もしも理由があるのなら。

いつしか私はこの案件を“保留”BOXに放り込んで忘れてしまい、代わりに別のもつとたやすく達成感を得られるテーマにのめり込んでいった。

そう。それが観察と思考。分かっている。底なしの流砂に首まで飲み込まれてしまつたんだ、つてことは。

その日の朝も、いつものベッドで目を覚ますなり、私は大急ぎにパジャマを脱いだ。パリパリにアイロンをかけた清潔なブラウスに袖を通し、紺の生地にエンジ色のチエツクが入ったスカートををはき、わずかに明るく染めたセミロングの髪にブラシを入れる。赤いタイをまつすぐに締め、色付きリップを丹念に塗り、姿見に向かって笑顔の練習。うん、かわいい！

そのまま私は家のドアを蹴つ飛ばすようにして飛び出した。

空は色とりどりの星々煌めく漆黒。下は一面に広がる灰白色レゴリスの荒野。柔らかな堆積物の上に自分でつけた千億往復分もの靴跡を辿り、私は軽快に駆けて行く。肩に担いだ大きなダンボールの筒は、苦勞して作った凹面鏡式望遠鏡。背中のランドセルには観測記録用のタブレット。ブラウスの胸ポケットにはミント味ラムネのプラスティック・ケース。駆け足一步ごとにシヤカシヤカ楽しい天体観測の必需品だ。

私は荒野を走り抜け、*“うさちゃんクレーター”*の外縁をぐるりと回り込み、向こう側の巨岩の上まで一息に駆けのぼった。私はこの岩を*“ことり岩”*と名付けた。このあたりでは一番標高が高いし、固い岩盤のおかげで望遠鏡もぐらつかないし、うつつの観測スポットなのだ。

荷物を下ろし、手早く望遠鏡を設置し、はやる気持ちを抑えながら覗き込む。いったん望遠鏡から目を離し、遠方を眺めて方角チェック。*“にゃんこ山脈”*がここ、*“こ*

にゃんこ岳”がここ、”おおにゃんこ山”の山頂がこの角度。だから確かに望遠鏡の向きは真南で間違いない。

私は記録をつけるのも忘れ、ドキドキしながらもう一度望遠鏡を覗いた。溜息が出る。星の輝きを見つめたまま、手探りでミントのラムネを口に放り込む。

うっかり7粒もいっぺんに食べてしまつてたらしく、ガリツと噛んだら口の中がメチャクチャ死ぬほど爽やかになった。

「やっぱりだ、間違いない」

ミントのヒリヒリさえ敵わないほどに、この発見は刺激的。

「あの星は他人と交信してる。」

他の誰かが宇宙には居るんだ」

来訪者の存在に気付いたのは、つい先週のことだ。いつものように万有引力仮説の証明のために惑星の公転軌道を観測しようとしていたら、”惑星わんわん”の0.03ラジアン隣に見慣れない薄暗い星を発見した。天体観測は13歳の頃から4年間、ほとんど毎日休まずやってきた。この空に見える星のことは隅から隅まで知り尽くしてる。今さら未知の星が見つかるなんてことがある？

無論、単純な見落しとの可能性だってなくはないけど。

これまでそこになかった星が新たに出現した、と考えるほうがいくらか現実的だ。

私は夢中になって新天体を観測した。星図に書き加え、数時間おきに位置を測定した。その運行が明らかに恒星の軌道からずれていることに、その日のうちに気付いた。惑星だ！ あの星はうちの太陽系内にいるんだ！

いや、「いる」んじゃない。うちの太陽系に「来た」んだ。どこか他の恒星系から、恒星間の途方もない暗闇を何十年もかけて横切つて！

私は数日にわたつて観測と記録を繰り返した。その中で奇妙なことに気付いた。基本的には岩石惑星のように思えるのだが、時々発光しているように見えるのだ。時々？ そんな馬鹿な。星は光るか光らないかだ。もしも光が付いたり消えたりするとしたら、それは——？

ぞつとするような閃き。表現しようもないときめき。分かつてもらえるだろうか。

しかしそれ以上詳しい観測は不可能だった。新天体の光が弱すぎる上に距離が遠すぎて、それまで使っていたレンズ式望遠鏡ではぼやけた像しか得られなかった。そこで私は大急ぎで家に駆け戻り、より鮮明な像が得られる新型望遠鏡を開発して、再び“ことり岩”に戻ってきたというわけなのだ。

新しい望遠鏡は期待以上のものを私にもたらしてくれた。この新天体は一個の岩石惑星ではない。円盤状に回転する無数の小惑星の系だ。よく見ると、小惑星が密集して

いる核が2ヶ所、円盤の直径の左右に1つずつある。望遠鏡を覗きながら私はニヤニヤ笑いを浮かべてしまう。

この新天体は、もとは2つの岩石惑星だったに違いない。連星となってお互いの周囲を公転していたものが潮汐力限界を超えて接近し、お互いを崩壊させあつて混ざり合い、ひとつの円盤となったのだ。

私はこの来訪者に“ハート連星”という名前を付けた。私のハートを驚掴みにした最高にかわいい星にはピッタリの名前だ。

そして、“ハート連星”の発光は——確かに見えた。円盤を構成する小惑星群のあちこちで、とりわけ2つの核の付近で、頻繁な発光現象が確認された。ぞくぞくしてくる。ありえないことが起こっている。小惑星が自然に光つたり消えたりするはずがない。

ならばこの光は、人為的なものだ。

誰かが居るんだ、あの星には。

その誰かが光を放っている。まるでおしやべりするみたい……

待てよ？ “みたい”じゃないとしたら？

私の興味は星そのものから、発光の明滅パターンを観測に移行した。記録を取りながら何度叫び声を上げたか分からない。パターンがある。何度も類似の発光パターンが繰り返されてる。ときどき型が崩れもする。やけくそ気味にメチャクチャ光つたり、逆

にピタリと真つ暗な時間が続いたりもする。言語だ。交信だ。これが意思のやりとりでなくてなんだ！

ほんとにおしやべりしてるんだ！

私はタブレットにたつぷり溜め込んだ記録を手にかへ駆け戻り、時間を忘れてその解説に取り組んだ。もちろん全然ダメだった。未知の言語を信号のパターンだけから読み取るなんて至難にもほどがある。でも希望はある。もつとデータを増やせばいい。明日も、明後日も、記録を続けよう。きつと見えてくるものがあるはず。

熱中するうちにお腹が空いて、冷凍のチャーハンをチンした。手を合わせて「いただきます」。食べ終わったら紙皿をゴミ箱に放り込み、インスタントのコーヒーを淹れて再びデスクへ。風呂に入った。風呂の中でも考えた。湯水のような思い付きを、風呂からあがるなり全裸のままタブレットにメモ。くしゃみをひとつ。もうひとつ。「やばい風邪ひく」大慌てでパジャマに袖を通し、ベッドの上で布団にくるまる。

たつたひとりで。誰ひとり見とがめる者のない、誰ひとり見てくれる者のない、この岩石惑星のまんなかで。

17年、1日も変わらずそうであり続けたように。

疲れ果てた私は、あつというまに眠りに吸い込まれていった。夢の中でも私はずっと考え続けていた。あのパターンはどういう意味？ 一体なにをおしやべりしているの

? “ハート連星”、あなたはどこからきて、どこへ行くとうとしているの? とうか
そもそも——そもそも——

そもそも?

そもそも、私、なんでこんなに心を惹かれているの?

私はぼんやりと瞼を持ち上げた。

見慣れた天井。知ってる匂い。安心する私だけの部屋。胸の奥がゾワゾワしてる。

生まれて初めて、目じりから耳の方へと伝い落ちていった水の滴。私はそれを、“な
みだ”と名づけることにした。

「さみしいよ」

寝ぼけ頭から湧き出た眩きは、自分でも気付いてなかった私の本音。

孤独なんて概念自体、縁遠いものだったはずなのに。

「私もあなたと、おしゃべりがしてみたい」

(つづく)

02. 初めてののおしやべり

自分がどんな人間であるか、自分で表現するのは難しい。というか、表現以前にちゃんと認識できてない。「私、こんなやつなんですよ」なんて言ってみたところで、そこには絶対に視点である私の願望とか偏見とかが入ってしまった。そもそも物理的な観測という意味でだって、私は私を見たことがない。辛うじて、鏡像や動画というデータで知ったつもりになっているだけ。

だから正確ではないかもしれないけれど、私と長年付き合ってきて、私つてこれが得意なんじゃないかな、とそれなりの確信を抱いていることもある。

根気だ。

ひとりでコツコツ長く続ける。

それはね……うん。たぶん、得意だと思う。

そういうわけで私は続けた。3日。100日。500日。私はひたすら毎日「ハート連星」の観測を続け、「おしやべり」の解説に取り組んだ。無数の光の瞬きの中から、共通のパターンが登場する場所を抽出し、共通点を探し出す。最も頻繁に使われる

パターンはどれ？ そのパターンの前後に繋がる確率が最も高いのは？ 文法構造や単語の意味について仮説を立て、検討し、ダメなら「ダメでした」フォルダに叩き込む。フォルダがみるみるファイイルで埋まっていく。

728個目のダメがフォルダに収まったある日、私はついに意味を持つらしき単語を見出すことに成功した。「ハート連星」の右の核と左の核、それぞれ一方しか使わないパターンが存在する。出現頻度はそれなり。そして右の核がそのパターンで光ると、ほぼ必ず左の核がそれに反応して光る。逆もまた然り。

これって、お互いの名前じゃないか？

名前！ そうか。以前に私がした推測どおり、元は2つの星だったのだ。それが混ざり合ってひとつの小惑星群と化した今でも、2人はそれぞれ別の意識を保ち、別の名前を持つているのだ。私はそれまで、「ハート連星」がどこか遠くにある他の星と交信しているのだとばかり思っていた。勘違いだった。おしゃべりは、連星の右と左の間で行われていたのだ。

これは大きな前進だ。名前なら、きつと主語として使われている文があるはずだ。ここから文法構造が読み解けるかもしれない。私は大慌てで検索をかけた。あった。あった！ 山ほどあった！ あとはこの検索結果を主語的使用と目的語的使用に分類していけばいい。

で、そこからさらに300日。

根気だ。得意技でね。

ついに私は、「ハート連星」の光言語の文法構造をあらかた特定するに至った。達成感はあるが、これがさらに大きな問題の入口であることにも気付いていた。語彙だ。文の構造が分かったところで、そこにあてはめられるひとつひとつの単語の意味については何も手掛かりがない。論理だけで導き出すのは無理がある。

数日間熟考した末に、私は新たな計画を実行に移すことにした。

“ことり岩”の山頂に私はあれやこれやと機材を運び上げ、超大型のビームライト発生装置——早い話が懐中電灯のおぼけみたいなものをごしらえた。ビームはミミリラジアンズレもなく、「ハート連星」の方を向いていて、タブレットと無線接続して明滅パターンを操作できるようになっている。

迷った時には行動あるのみ。

おしゃべりしてみようというのだ。推測のみで導き出した、ほんの5個ばかりの語彙を武器にして。遙か太陽系の外縁部を飛行し続ける謎の来訪者たちと。

貧弱すぎる語彙力のために、文章を練り込む余地はほとんどなかった。私は大きく深呼吸し、覚悟を決めて、第一声を送り出した。

【私は、ハートにいる】

ビームライト通信機は仕様通りに作動した。私はシャッターがシャカシャカいうのを聞きながら、じっと空を見上げていた。肉眼ではとても見えないあの黒い空の果てに、追い求めた“誰か”がいる。ちゃんとメッセージは届くだろうか。気付いてもらえるだろうか。どう思われるかな。いきなり話しかけて、なにこいつとか思われなかな。

ぐるぐる妄想する時間はたっぷりあった。

私は岩の上にピンク色の小さなマットを敷いて、そこにお尻を乗せ、長期戦の体勢を整えた。ポットのコーヒーに口をつけ、チョコレートバーを3センチかじる。破裂しそうなほどドキドキしてる。ほっぺたがフニフニほころんでいる。

“ハート連星”まで、およそ42光分。

つまり、最初の返信は1時間24分後——もしも返信があるのなら。

返信はなかった。

84分経過。144分経過。260分経過——“ハート連星”はその間、ずっといつも通りのおしゃべりを続けており、私の光言語には一切反応を見せなかった。念のため、私は30分おきに5回同じ信号を送った。半日ほとんど目を離さず望遠鏡を覗き続けたが、返事らしきものは、やはり皆無。

そりやそうだ。

私が間違つてた。希望的過ぎた。私の光言語が全く間違つてて意味不明なのかもしれないし、こちらに注意を払っていなければ信号に気付かないだろうし、そもそも光が届いてない可能性だってある。クリアしなければならぬハードルが多すぎるのだ。

私はすっかり落胆し、望遠鏡を抱えて、足を引きずるように家へ戻った。

疲れ果てた体をベッドに投げ出し、パジャマに着替えもせずに目を閉じる。瞼の裏に自分を呪う言葉ばかりが浮かんでくる。『連星』と交信する中で語彙を増やしていこうという計画にはどだい無理があつたのだ。でも……

でも、この方法以外に、一体どうしようがあるというのだろうか。

手詰まりじゃないか。

結局、私にはおしやべりなんてできないのだろうか。

他人と意思を交流させるなんて、不可能なことだつたのだろうか。

それならせめて、ここに来ないでほしかった。

孤独という、この胸の、どうにもならないものに、気付かせないでほしかった――

不思議なものだ。

一度『なみだ』を知ってしまったら、もう流さずにはいられない。

睡魔が容赦なく襲ってくる。きっと明日になれば、顔も、髪も、スカートも、ぐちゃ

ぐちゃになつてゐるに違ひなかつた。

私は夢を見た。

夢の中で、私はどこか、全く知らない部屋の中にいた。時が止まつたような静寂の中で、白い埃だけが陽光を浴びながら舞つてゐる。私はポカンと口を開け、部屋をゆつくりと見回した。日当たりのいい窓際のカフェテーブル。気品あふれる籐の椅子。横手の戸棚には、なんだかよく分からない奇妙な品々がずらりと並べられてゐる。黒い矢じりのようなもの。半ば朽ちかけた頭蓋骨。手のひらに載るほど小さな陶器のカエル。逆さに吊るされたドライ・フラワー。

そのなかに、容量１リットルほどの透明なビンがあつた。フタは開けられてビンの横に寝かせてある。中は空だ。

私はそのビンになぜか心惹かれて、そつと手を伸ばす――

「誰もが世界の内に自ずから在るように、彼女らもまたそこに在つた」

突然聞こえた声に、私はびくりと震え上がった。

「とはいえ世界を広げようと手を伸ばすことは不可能ではないし、有意義なことでもある。ひとはそれを見聞と言ふのだね――おや？」

私は背後を振り返つた。怯えて部屋の中を探し回つた。だが、声を発するようなもの

はどこにも見えない。言葉を操る以上、相手は人であるはずだ。私と同じような何者かであるはずだ。なのに部屋に見えるのは静物ばかり。

「おやおや。僕が捉えられないかい？」

申し訳ない、これは僕の側のミスらしい。なにしろ僕にとつても、こういう形でお客様を迎えるのは初めての経験だから——」

身を切る悪寒で目が覚めた。

深い眠りの奥底から一気に覚醒したときの茫然自失。私は目を丸々と見開いたまま、ただ天井を見つめ続けた。左腕が痺れてる。呼吸をするのも忘れていた。ゆっくりと吸い込んだ息に髪の毛の数本が混ざり込み、私は舌でそれを口の外に追い出していった。

なんだ、今の？

こんな経験初めてだった。夢を見ることは今まででもあった。でも夢に出てくる場所は大抵この部屋とか、外のクレーターとか、あとは真つ暗な宇宙空間とか。私がこの目で観測したことがある場所、でなければそれに似た場所だけだった。

あそこは——あんな部屋は——私は知らない。想像したことさえない。籐の椅子？

頭蓋骨？ 陽光射すカフエテーブル…… 〃陽光〃 って何？

そのとき私は手の中に何か握り込んでいることに気付き、驚きのあまり、「わあ！」と大声を上げて跳び起きた。手の中の物を大慌てで投げ捨てる。円盤状のそれが、乾いた音を立てて床に転がり落ちる。

信じられない。

見まちがえるはずがない。

フタだ。

1リットルの透明ビン。その横に静置されていた、赤黒いプラスチックのフタ。

夢の中で思わず手に取ったものが、どうして今、ここにある!?

私はフタを睨んだまま、たつぶり1分余りも硬直していた。やがて覚悟を決め、デスクの50cm定規を引き抜いて、赤黒いフタをツンとついた。何も起きない。軽く叩いてみる。少し跳ねた。私は恐る恐る手を伸ばし、フタを手を取ってみた。内側に刻まれた緩やかなネジ。側面に規則正しく成型された滑り止めの溝。円の中心に小さな窪みがあるのは、金型に樹脂を注入した時の跡だろう。なんとという精密さ。すごい技術だ。理屈は分かるけど、私にはとてもできない。

そう、私にはとてもできない。

その事実が全てを物語っている。このフタは私が作ったものじゃない。つまりどこか他の恒星系からもたらされたものだ。原理は全く不明ながら、私は今、夢の中で遙か

彼方の誰かと交信していたのだ。そう考える以外にない。

すると、夢の中で私に呼び掛けた、姿も見えないあのひとは――

と、そこまで考えたところで、私の頭脳に新たなアイディアが閃いた。

姿が見えない。けれど声は聞こえた。

ひよつとして、これが！

私は家のクローゼットをまるごとひっくり返すようにして、大昔に造った装置をいくつか引つ張り出した。皺くちやになった服をポンポン脱ぎ捨て、滝行のようにシャワーを浴びて寝汗を流し、大急ぎに着替えて家から飛び出した。向かうは再び「ことり岩」だ。

私は大きな思い違いをしていたのかもしれない。

夢の中で、私には「僕」の姿が見えなかった。だが存在は感じられた。声は聞こえた。夢の話といえればそれまでだけど、ここで少し考察してみよう。実際姿が捉えられないのに声だけが届くとしたら、それはなぜか？

光がこちらへ来ていなくても、音はちゃんと届いたからだ。

視覚は光を捉え、聴覚は音を捉える。両者は全く異なるものだ。一方だけが情報を感じたとしても、何ら不思議はないのだ。

では、逆に考えるとどうだ？

光は届いているはずなのに、話は通じていないとしたら、それはなぜ？

それは——「ハート連星」が、可視光以外の何かを用いて会話をしているからだ！

私が観測した光の明滅は、実は彼女らの会話そのものではなく、別の手段でおしゃべりする際に放出される副産物のようなものだったのだ。私のメッセージが届かないのも当然だ。そもそも彼女らは光を見ていない。

では、他の何を？

たとえば、不可視波長領域の電磁波とか！

私はいつもの観測地点に陣取り、次々に装置を組み立てていった。まずはこれまでと同じ光学望遠鏡。次に紫外線センサー。赤外線センサー。下の振動数帯用にパラボラ型レク・テナ。X線領域だとかかなり厳しいけど、最悪他が全部ハズレの場合は何か方法を考えてみよう——光子を浴びた金属の温度変化を観測するとか。

私の推論は的中した。「ハート連星」からの紫外線が観測されたのだ。私はその強度変化を注意深く可視光の明滅パターンと比較して、両者が間違いなく連動していることを確認した。彼女らの言葉はこれだったのだ。

もう、やることはひとつ。

大急ぎで紫外線ビームの照射装置を作り、「ことり岩」の上に設置した。以前と同じ

方法で、私からのメッセージを送る。届いてくれ。返事してくれ。祈るような気持ちで観測機のとなりに座り、じつと星空を見上げ続ける1時間と17分——“ハート連星”までの距離は、今では片道38・5光分に縮まっていた。そして、ついに。

無限に広がる空虚な宇宙に、初めて“ハート連星”を見出したあの日から、ちようど1000日が過ぎたとき。

私は、彼女らの“声”を受け取った。

「え……」

私は拳を固く握り、しゃがみこみ、石ころのように小さく丸まり——

「いやったあ——っ!!」

空一杯に手足を広げて跳び上がった。

なお、このとき受け取ったメッセージは、翻訳するところである。

「え……? 誰……? こわ……」

こら。笑わないように。

とにかく記念すべき偉大な第一歩なんだから、これは。

03. 仲裁者

私は舞い上がっていた。

自分でもちよつと反省してる。しかしあの時はどうしようもなかった。あまりにもタメが長すぎた。17年分の孤独。どこかに他者が存在するのではないか、と考え始めてからだけでも4年。ずっと私はコミュニケーションの相手を求めていて、そして、ようやく得た。ついに得た。

これが舞い上がらずにいられるだろうか。

私が入り組んだことはこうである。全部で9基の紫外線ビームを用意する。最初は1つだけ点灯させ、2、3、4と順に数を増やしていく。そして返答を待つ——向こうが意図を察してくれることを、ひたすら願いながら。

3度目の挑戦で返答が来た。紫外線の明滅パターンが、途中に1分ずつの間を空けて、9種類。やった！通じた！すぐさま私は3基の紫外線を灯し、その直後に「連星」から来た3番目のパターンを送る。1分後、7基灯して7番目を。5基灯して5番目を。

それに対する返信は、大量のおしゃべりを解読した中で何百回と見たパターン。

そうか。これが【YES】だ！

こうして私は1から9までの数字と、【肯定】の語彙を得た。これを応用してみよう。紫外線の数と全く異なる数字を送ってみる。さつきと同様、1分おきにランダムで3回。再び返信が来た。【YES】とは別の、しかしやはり何度も見たことがあるパターン。

【NO】だ。いいぞ！ “ハート連星” は完全に私のやりたいことを理解してくれている！

判明した語彙のパターンをタブレットで検索し、分かりやすく私の言葉に置換してみる。無意味な記号の羅列に過ぎなかったデータが、少しずつ、鮮やかな意味の色彩に染まっていく。私はその中からいくつかの語彙の意味を推定し、“連星”とのやりとりで確認していった。

過去17年の人生で、これほど楽しい時はなかった。匹敵しうるのはただ一度、“言葉”という道具を作るアイディアが閃いたあの時だけだ。あれほどのブレイクスルーですら、このコミュニケーションほどの興奮は得られなかった。なぜならあの時、私はまだ言葉の持つ恐るべき威力がよく分かっていなかったのだから。

今なら分かる。言葉は力。言葉は武器。そして言葉は、世界そのもの。

私は寝る間も惜しんでメッセージを送り続けた。そしてひたすらに返答を待った。興奮のせいか、全然眠くならなかったのだ。お腹も減らない。『ことり岩』に居座り続けてはや50日。

私は燃えていた。

今度は映像を送

つてみるの……は……

「……あれ？」

唐突にあたりの光景が一変した。

ここは小ぢんまりとした部屋の中。以前に夢で見た、籐の椅子とカフェテーブルと、奇妙な戸棚のあの部屋だ。私は茫然と部屋の真ん中で立ち尽くした。私は一瞬前まで『ことり岩』にいたはずだ。不眠不休が続きすぎて、ぶっ倒れて夢の世界に来てしまったのだろうか？ それにしたっておかしい。意識がはつきりしすぎている。

「うん、どうやら今度は成功らしい」

背後から聞き覚えのある声があった。私は振り返る。

そこにひとりの、ひとが立っていた。多分ひとだと思う。なにしろ私は孤独惑星に17年。自分自身の鏡像しか見たことがなかったのだ。確証はないが、私と同じ2本の脚

に、2本の腕。胴体と頭。私とは全然違う顔付き。これが、ひと。他人というものなのだろう。

そのひとは、私に穏やかな笑顔を向け、そつと手の仕草で椅子を勧めてくれた。

「どうぞくつろいで。ようこそ “ヤドリギ魔法堂” へ」

「ヤドリギ?」

「この店の名前さ。自分で付けてみたんだ」

ああ、と私は納得の声を挙げた。このひとも自分の世界の形を自分で決めていったんだ。私が “にゃんこ山脈” や “ちゅーちゅー平原” に名前を付けたのと同じように。そう思うと、このひとの爽やかな孤独が伝わってくる気がした。

「いい名前」

奥の給湯室でポットにお湯を注いでいた彼が、私の声に驚いてこちらに目を向ける。

「かわいいと思う」

「ありがとう。そう言ってもらったのは初めてだよ。」

さ、お茶をどうぞ。ブランデーはお好みで。ひとさしすると味わいがより深まるんだ」

店の主に勧められるままに私はカップの紅茶に口をつけた。飲み慣れない奇妙な味。喉の奥をさらりと通過する淡泊な熱。普段コーヒー派の私には縁が薄い飲み物だけど、

この香りは悪くないと思えた。

「おいしい。紅茶も悪くないな」

「気に入ってもらえて嬉しいよ。でも、嬉しいだけでは済まないこともある」

店主は私の向かいの席に座った。彼が宇宙の暗闇そっくりな目で、私をじつと見つめてくる。私は負けじと見つめ返した。彼がたじろいだのが分かる。彼の額に少しずつ汗が浮かび始めている。

「正直に言おう。僕は君にお願いに来たんだ。僕の小さな友人たちを守るためにね……」

「お願い？ 友人？」

「『フェルミ・ハートのパラドクス』を知ってる？」

聞いたこともない。私が眉をひそめていると、彼は慎重に頷いた。

「なぜ自分はひとりぼっちなのか。なぜこの宇宙に他者がいないのか。その寂寥に囚われたひとは古今枚挙のいとまがないほどだ。まさに君がそうであるようにね。」

ひとは自分の世界で生きていながら、同時に他者を求めている。しかし自分は他人にはなり得ない。シンプルな事実だが、それを心の底から受け入れるのは極めて難しいことだ。他人は自分とは違うものだ、と理屈では知りながら、同時にいつも、他人の中に自分の姿を探している。

自分はこう思う。相手もこう思うはずだ。自分はこう感じた。この気持ちはきつと共有できるはずだ……とね」

「……私と『連星』とのおしゃべりのことを言ってる？」

「彼女はハネムーンの途中なんだ。旅行代理店の役目を請け負った僕には、道中の安全を確保する責任がある」

「おしゃべりするのが、いけないこと？」

「そのルールを定めるのは僕ではないよ。この空虚な宇宙においてはね。」

だからこれは単なる力関係の問題に過ぎない。誰かが命令したり強制したりできることではない。それでも僕たちは抗わねばならない。自分の身体と精神を守るために」

「何が何だか分からない！ もうはっきり言って！」

「やはり気付いていないんだね……」

君は彼女を飲み込もうとしているんだよ」

私はぼかんと口を開いて放心した。頭の中で百万個もの疑問符がフェスティバルを開いているみたいだ。彼女って『ハート連星』のこと？ 飲み込む？ 私が？ このちっぽけな17歳女子が？ あのばかでかい小惑星群を？

何言ってるんのこのひと？

「17歳、か。それひとつ取っても事態の一端が見えてくる。」

君が使う1年という単位は、僕らの尺度では1億年に相当する。つまり僕らに言わせれば君は17億歳というわけだ。それほどの長きにわたって、君は孤独の宇宙で生き続けてきた。それは驚嘆に値することなんだ」

「それって褒めてる？」

「ものすごくね。君は、君自身が思っているより遥かに巨大な存在なんだよ。君に比べれば僕などは塵のようなもの。君の甥っ子の義理の娘の幼馴染の、子供の子供のそのまた子供の中からたまたま選ばれた、出来の悪い管理人というところさ。」

今まで比較対象がなかったから気にしたことなかったんだろう？ 自分の持つ能力がどれほど偉大なものか。どうして岩以外何も無いはずの惑星に家や学生服やミントのラムネが存在するのか。そしてなにより、君が片時も手放さないその石盤タフレットがどんなに強大な魔力を持つ呪物であるのかを。

すべては君の内より生まれた。そして、君の内へと消えていく」

「『ハート連星』もそうなる？」

「すでにそうなりかけている。事実、互いの距離感を見失ってひとつに融合したはずの彼女たちが、半ばふたつの存在に戻りつつあるんだ。君がそう観測——了解したためにね。やがて君の了解の系が彼女たちの存在を完全に規定し、併呑する時が来るだろう」

私は。

私は椅子を蹴って立ち上がった。

テーブルに両手をつけて店主に詰め寄った。彼が息を飲み、僅かに身を引く。怯えているのか。恐れているのか。この謎の魔法使いが、私なんかには気圧されているのか。小さくて弱くてひとりぼっちな少女ひとりに。訳が分からない。

いきなり現れて。

いきなりひとに希望を持たせて。

そのうえでいきなり『おしやべりをやめろ』？

自分勝手にもほどがある！

「私はただ話したいだけ。友達が欲しいだけ！ ただそれだけなんだよ！」

「もちろん分かっている」

「なら私は好きにする!!」

長い、沈黙。

店主はそつと溜息を吐いた。

「世界のありかたを決めるのは自分だが、決めたありかたに世界の方で従ってくれるとは限らない」

彼の浮かべた表情は、色濃い悔恨に満ちて、切ない。

「これだけは覚えておいてほしい。

宇宙に煌めく幾十億の星々の中で——ひとは、常に、ひとり」私の意識はそこで途切れた。

気が付けば私は「ことり岩」の上で大の字になっていた。

身体を起こし、むず痒い頭皮を搔く。あいまいな意識のままに望遠鏡を覗き込み、タレットの映像記憶を確認する。夢を見ていたのはほんの30分ほどらしかった。その間に「ハート連星」からの返信が届いていて、私はほっと、頬をほころばせる。

そうだよ。おしゃべり、楽しいじゃない。

「連星」だって私との会話を楽しんでいる。だってこんなにすぐに返事をくれる。最近では向こうから新しく話しかけてもくれるようになった。すごく楽しい。往復分の時間差がもどかしくてたまらないほどだ。

コミュニケーションの何がいけないっていうんだよ。

何かがいけないって言うのなら……この目で確かめてみるべきだ。これで次のプロジェクトが決まった。

話そう。彼女らと。行こう。「ハート連星」へ。

直接会おうんだ。話し合おうんだ。

つまり——今度は宇宙ロケットだ！

04. アローン・イン・ザ・ダーク

理論は何年か前に構築済みだ。まだデータ不足ながらも万有引力仮説と運動方程式から必要な初速度は計算できるし、運動量保存の法則を使えば推進剤の質量と噴射時間も求められる。私の体重と衛星本体の自重を考え、燃料切れ後のロケット部はもつたないから切り離して推進に活用するとして、設計は……だいたいこんな感じ。

理論があるのに今まで一度も挑戦しなかったのは、これといつて行きたい星がなかったためだ。この星から観測する限りでは太陽系内の惑星はどこも大して面白そうでもないし、恒星間航行はいくらなんでも無理。二度とこの星に帰ってこられないリスクばかりが大きくて、得る物が小さすぎたのだ。

でも、手の届きうるところに、どうしても話し合いたい相手がいるのなら。リスクを冒す価値は、ある。

急がなければいけない。私が初めて「ハート連星」を観測してから、もう1100日余りが過ぎている。最接近まであと152日。このタイミングを逃せば次のチャンスはない。彼女たちは私の太陽系を通り過ぎ、銀河の果ての、別の恒星系へと旅立ってし

まう。

やりとげてみせましょう。17歳女子をなめるなよ。

その日から私はおなじみの集中力を発揮して、ロケットの開発にかかりつきりになった。タブレットで図面を引いているとき、軌道計算をしているとき、液体燃料の種類と混合比を検討しているとき、奇妙に心地よい意識の空白にひたれた。私を縛り付けるあらゆる面倒ごとが、どこかよその世界に消え失せてしまった気がして。

そんな私を現実に引き戻したのは、紫外線センサーの反応だった。

「あつ」

私は声を挙げてしまった。完全に「ハート連星」との会話のことを忘れてしまっていた。彼女たちと会話するためにロケットを作っていたはずなのに、肝心かなめの彼女たちが意識から消え失せてしまうなんて。

大慌てで送られてきたメッセージを翻訳する。ロケットに熱中している間に、メッセージは3件も溜まっていた。

【こんにちは。今日は太陽が明るいね】

【昨日よりという意味】

そして今届いたのがこれ。

【どうかした?】

どうかしてる。ものすごく。

私は返事の明滅。パターンをタブレットに入力しようとして、ひたりと指を止めた。ここまで考えてもみななかった。自分が彼女らに近づいていこうとするのに精いっぱい。私は宇宙へ飛びたい。彼女らの星へ遊びに行きたい。でも、向こうはどう思っているだろう？ 私が押しかけたりしたら、煩わしく思わないだろうか。もし私なら。私の星に正体不明の誰かがやってきたら。

私は……ちよつと……嫌だ。

私は考えた。彼女たちが私の訪問を嫌がらないかどうかを、だ。丸1日かけて考えて、この問題を解くのは不可能であることに気付く。手がかりがない。筋道もない。どれほど可能性に想いを巡らせたところで、それは全て、*“私ならどう思うか”*。

彼女たちは私じゃない。

悩み、悩み、呻き、何も得ず。

結局、おそるおそる、こんなメッセージを送ってみることにした。

【遊びに行ってもいい？】

飛び降り自殺するくらい覚悟で送った問いだ。彼女らはこれを見てどう思うだろう。どんな返事が来るだろう。そもそも返事があるだろうか。気になりすぎて作業が何も手につかなくなり、私は返信を待つ間、ただひたすら*“ことり岩”*の上をぐるぐる

と歩き回り続けた。

センサーが「連星」の言葉を受け取り、アラームを鳴らす。

私はタブレットに飛びついた。

返信は、3回連続。

「!!」

「!!」

「!!」

「!!」

「!!」

「!!」

「!!」

58日後、私はお手製のロケットに乗り込み、17年住み慣れた惑星から飛び立った。

地表が離れていく様子をぜひとも窓から見えてみたかったけれど、私の身体は恐るべき慣性力によってシートに押し付けられ、窓を覗くどころか指一本動かすことさえできないありさまだった。液体燃料を燃やし尽くし、ロケットを切り離し、三角錐型の宇宙船を予定通りの軌道に乗せる。あとはここから84日。最接近するタイミングほぼびつ

たりで「ハート連星」の衛星軌道に乗れるはず……

加速を終えた船の中は、燃焼中の大騒ぎが嘘のように静まり返っていた。私は窓にへばりつき、つい数時間前まで私が立っていた惑星を見下ろした。灰白色レゴリス以外には何も無い、私ひとりだけが生きる星。広い世界のように思えていたけど、こうしてみると、ちっぽけな岩の塊だ。

他の世界は、他の惑星は、みんなこんな姿なんだろうか。

この宇宙には一体いくつの世界があるのだろうか。世界にはいくつの形があるのだろうか。小さな世界。大きな世界。不定形の世界。光すらも飲み込みただ漆黒の奥底へ沈み込むばかりの世界。無限個とさえ思える世界が乱立する中で、私のあの星は、お世辞にも見栄えのするものじゃない。

じゃあ、彼女たちの世界は？

「ハート連星」はどんなところ？

暗闇の中でたつたひとりと、私は想像し続けた。望遠鏡で見た概観から、空想はいくらでも膨らんだ。どういう原理で光ってるんだろう。どうして小惑星がおしやべりできるんだろう。それとも誰か住んでるのかな。私が喋ってる相手は星そのものじゃなくて、星に棲んでいる人だって可能性もある。そうだとしたら、その人はどんな姿をしているのかな……

想像の中で、不思議と私は、孤独じゃなかった。

空想だからこそ、繋がりあえている気がした。

徐々に「ハート連星」が近づいてくる。私は窓から彼女らの雄姿を眺め見た。大きい。なんて大きいんだろう。それに……きれいな。宝石のように煌めく小惑星群が、規則正しく描き出し続ける幾何学模様。その渦巻きのふたつの核が、じつとこの宇宙船を見ている。私のことを見つめている。まるでそれは、闇しかない宇宙の中に、たつたふたつだけ見開かれた瞳みたいだ。

「あのね。かわいい服、いっぱい持ってきたの」

窓に両手を貼り付けて、私はいつしか、訴えかけていた。

「これはすごく面白いマンガ。自分で描いたの。それにね、私が考えたパーティーゲーム。誰でもすぐ理解できて、みんなで遊べて、そのうえ奥深い戦略性もあるやつ。もちろんメントも、チョコも、ポテトチップスも、山ほど鞆に詰まってる。

だから、私も、仲間に入れて。

あなたたちの輪の中に、私の座るすきまを——ほんの少しだけ!!」

声が届いたはずもないのに。

「ハート連星」の円盤が、ほんの1万kmだけ、半径を広げて見せた。

それが歓迎のあいさつなんだと気付いて、私はちよつとだけ、泣いた。

私は宇宙船を制御して「ハート連星」の衛星軌道に入り、無数の小惑星群と一緒に回りだした。それはまるで私が「連星」の一部として溶け込み、融合してしまったかのようだ。私は自分の星から持ち込んだ玩具をひとつひとつ窓から示し、「連星」はその物を表す彼女らの言葉を教えてくれた。私の語彙力は飛躍的に向上していき、ほんの20日余りで5000語を超えた。もう簡単な日常会話なら、さほど詰まることなくこなせる。

だからもちろん、いっぱいおしゃべりをした。

私の想像通り「連星」はもともとふたりの別人だったということ。今はふたりで別の恒星系へ旅行している途中なんだということ。それに、「連星」のふたりが生まれた惑星のこと。液体の水が大量に溜まった海があり、濃密な大気による散乱で空は青や赤に色づいて見え、その中に何百億もの生物が暮らしている。私にとっては唾然とするしかない世界。脳裏に想像したその星の美しさに圧倒されながら、私はむきになって自分の星のことをまくしたてた。灰白色レゴリスの大地がどれほど清潔で純粹か。大気がないためにいつも真っ黒に見える空がどれほど心落ち着くものか。そしてそこから観測される銀河の星々が、どれほど目映く、どれほど胸を打つものか――

【わかる】

“連星”の片方が囁く。

【すてきだと思っ】

もう一方が小惑星帯の腕で私を優しく包んでくれる。

わかる？ そうだろうか。すてき。そうかもしれない。自分でも分かってなかった。自分の星で暮らす17年の孤独の中で、私は自分の生まれた星を“すてき”なんて思ったことは一度もなかった。自分の周りにはある黒と灰の空間、それだけが私にとつてあたりまえのもので、そこに価値があるなんて想像したこともなかった。わかる。そうだ。今ならわかる。

話しこむうちに、話題はどんどんくだらないことに移っていった。私が毎朝鏡に向かって笑顔の練習してること。【見せて見せてー】【きゃーかわいいー】“連星”のふたりが昔ネパール人のインド料理屋で歌ったアホみたいな即興歌のこと。さらには恥ずかしい思い出のこと。“連星”の右側が私に耳打ちする。

【聞いてくれる？ あいつホント、いいかげんでー】

【んなことないってー。大人よ、年相応の落ち着き】

【デート当日に私の部屋でクソ寝坊してすっぴんで彼氏の車に駆け込んだのは誰だ？ー】

【あアー、んんー、そオーれエーわアアー！ でもでも、ちゃんとやることやったし、最低限の義務は果たしたっつーかアアー】

「前の日、デートあるって完璧忘れてたからねこいつ」

「なんだ秘密の暴露合戦か!? よし聞いて。議題は『こいつがセックスのときどこ触ると喜ぶか』」

「こらア!!」

「まあーずウー! おっぱいの下のオオオー! 肋骨の隙間のオオー!!」

「やめろばかアー!!」

『連星』の右と左が取っ組み合いを始めてしまい、私は猛烈な小惑星群の渦巻きにまともに巻き込まれ、誰もみ回転しながら悲鳴を上げた。話の途中から私は顔を真っ赤にして聞いていたし、今のこの乱闘だって、むしろ仲良しな恋人同士の愛撫みたいに見える。見ているこっちが興奮して、茹で上がってしまいそう。大人だ。大人の世界だ。

暴れ疲れたふたりのためにコーヒーを淹れた。どうやって渡したのかって? もちろん、カプセルに入れて射出して、落下軌道に乗せたんだよ。大気の邪魔が入らない星では、正確な位置を狙って落とすのはそんなに難しいことじゃない。

『連星』の右は、私が描いた漫画を貪るように読んでくれた。私も、彼女が書いた小説を読み漁った。文化背景が違いすぎて理解できないところもあるけれど、それは素晴らしい物語で、私は泣きそうになってしまった。そうしたら彼女も同じことを思っていたらしく、ふたりしてお互いの作品をひたすら褒め合うという、なんだかよく分からない

いい、でもとてつもなく幸せな時間を過ごせた。

“連星”の左は、私が作ったゲームに興味を示した。ひとりでダイスを振ったり何度もシャドール戦をやったりして、気が付いたら製作者の私よりも強くなっていた。私だっているんな戦略を想定してゲームを作ったんだ。でも彼女は私が想像もしなかった攻め手を次々に創り出していった。

嬉しかったけど、少し恐ろしくもあった。なんだか、私の生み出した私の一部が、私の手の届かないところで私ではないものに変質してしまった気がして。

その夜。“連星”の腕のベッドに横たわり、私は宇宙船の窓から星空を見た。私の惑星は、もう肉眼では捉えることもできない。かわりに、この太陽系の黒ずんだ太陽が、さして明るくもない光をぼんやりと周囲に放っているのが見える。私は溜息を吐いた。

なんて楽しいんだろう。

これが、他人。これが、外の世界。

でも、彼女たちはいつかここを去る。

恋人同士での楽しい旅行、その途中なのだから。私の太陽系を通りかかったのはただの偶然。少しぐらいの寄り道はいいだろう、それも旅の醍醐味だ。でも、ずっとここに居られるわけじゃない。

やがて旅の目的地へと飛び立っていく。この広い広い銀河の彼方、どこか別の恒星系

へ。そうすれば、もう永久に会えなくなる。そもそも出会えたこと自体が奇跡のようなことなのだ。一度別れた天体と再び巡り会うなんてことは、それこそ宇宙の終わりまで待ち続けたつて起きることじゃない。

宇宙は、それほどまでに、広い。

だから、私はまた——ひとり。

分かっていた。出会った瞬間、すでに別れの運命は定められているのだということ。理性と論理と知識とで、私は完全に理解していたはずだったのだ。

なのに私は願ってしまった。

この幸せが永遠であれと。

あのいけ好かない店主に、口酸っぱく警告されていたにも関わらず。

(つづく)

05. 漆黒の重力井戸

目覚めた瞬間、〝ハート連星〟の間に走る緊迫に気付いた。クールなはずの〝右〟がまともに動揺していて、いかげんなはずの〝左〟が懸命に彼女を落ち着かせようとしている。ふたりは私が目を覚ましたことにも気付いていない。空気が針となって肌に突き刺さるかのようだ。

【どうしたの?】

私が問うと、〝左〟は戸惑いながら答えてくれた。

【よく分かんない。違和感だけがあるんだ。前にもこんな変化があつたような】
変化。

その瞬間、電撃のように私の脳髓を貫く閃きがあつた。私は青ざめ、〝連星〟と反対側の窓に飛びつき、宇宙を凝視する。〝ちゅーちゅー座〟がここ。〝ハムちゃん座〟がここ。〝ちんちら大星雲〟が……違う。位置がずれている。だが星座の位置が変化するわけではない。

つまり、ずれているのは、こちらのほうだ。

軌道が太陽に近すぎる！

「やばい。太陽の重力に捕まったんだ」

「それって、どういうこと？」

「私たちどうなるの？」

「この太陽系の一部として取り込まれる。惑星となつて永久に太陽の周りを周回しつづけることになる」

「うそー！」

「地球に帰れないってこと……？」

“右”は泣き出してしまった。“左”が彼女を抱きしめ、必死にだめている。というより哀しみと衝撃を共有しようとしているのか。私は血の気の失せた顔で窓の前に崩れ落ち、混乱した頭脳の中で必死に思考を巡らせた。

私が観測した限りでは、“ハート連星”は充分な速度を持つてこの太陽系に飛来していた。そのまま太陽系を通過できるはずだったのだ。太陽の引力に捕まったということとは、何らかの原因で速度が大幅に低下したと考えるしかない。

何らかの原因、それは……

「まさか……私の運動量が……？」

ロケットの逆だ。ロケットは推進剤を棄てることで前に進む。それは運動量保存の

法則的に言えば、後ろ向きの運動量を分離させて自分が前向きの運動量を得ることだ。惑星との合体ではこれと逆のことが起きる。私は「ハート連星」の移動方向と逆向きに進んで合体した。つまり、「連星」に後ろ向きの運動量を与えてしまったことになる。

その結果、「連星」の速度は低下する。それは間違いない。当然のことだ。

でも普通それは問題にならないはずだ。なぜなら、運動量は質量と速度の積で求められる。私の体重なんて星とは比較にもならないほど小さい。どれほどの速度で私が突っ込んでも、砂粒が当たったようなもの。星の運動量の変化は無視できるほど小さいはずなのだ。

だが現に「ハート連星」は強烈に減速し、漆黒の重力井戸に引きずり込まれてしまった。

この事実が示すものはひとつ。

私は重たすぎたのだ。想定何兆倍も——いや、何垓倍も！

『君は、君自身が思っているより遥かに巨大な存在なんだよ』

夢の中で聞いた言葉が蘇る。

「私のせいだ」

拳の中に握り込んだ爪が、痛いほどに手のひらに食い込む。

「私が飲み込んでしまったんだ……彼女たちを」

悲嘆にくれる「連星」のそばで、私はずっと彼女たちの嘆きを聞き続けた。たまらない苦しさ。これもコミュニケーションの持つ味なのか。楽しさや明るさが数倍になる一方で、哀しみや切なさや愚かしさもまた、数十倍に増幅される。私は宇宙船の窓を極力見ないようにしながら、じつと床にうずくまり続けていた。私にはどうすることもできなかつた。

彼女たちは故郷から切り離された。もう二度と帰ることはできない。それがどれほど辛いことなのか、私には、想像することしかできないが、なんとなく分かる気はする。かつて恒星間飛行を計画し、結局、戻ってこれないかもしれないという漠然とした不安に駆られて中止した私だから。あの不安感が何万倍にも増したなら、どれほど胸が痛むだろうか。

一方で私は、異様な考えに囚われかけている自分にも気付いていた。
これでいいんじゃないか？

これでもう寂しくない。「連星」がこの太陽系に留まってくれれば、私は孤独じゃなくなる。

なんて奴だ。私はなんて残酷なことを考えてるんだ。彼女たちの都合は完全に無視

か。自分の願望のみか。自分でも滅茶苦茶だと分かっている。なのにどうしても期待をぬぐえない。ふと気が付くと、彼女たちと一緒に暮らすこれからの10年のことを空想し、楽しみにさえしてしまっている。自分自身の身勝手から全く逃れられない自分がいる。

それがたまらなく嫌で、私は両方の耳を塞いだ。彼女たちの嘆き声が聞こえないように。

声。そう、いつしか私は彼女たちの言葉を声として聴くようになっていた。紫外線ビームはもう何十日も使っていない。自分が異質な何かに変わっていくのが分かる。見たくもなかった自分の姿、醜くおぞましい異形が、今、浮き彫りにされつつある。

私は——— いったい何なんだ？

矛盾している。

身勝手な自分を猛烈に嫌悪しながら、どうしようもなく独りよがりの沼に沈み込んでもいる。

彼女たちが去ってしまったえば、私はまた、ひとり。

そんなのは、嫌だ。

私はお湯を沸かし、コーヒーを淹れて窓から「連星」の様子を見た。

【「コーヒー、飲む？」 きつと落ち着くよ】

恥知らずにも親切を装う私に、 “連星” たちは本気の感謝を返してくれる。

【ありがとう】

この頬に浮かべた笑顔。その奥で引きつっていた心。

私はコーヒートを詰めたカプセルを打ち出し、ふたりがその温もりを少しずつ体内に取り込んでいくのを見つめた。そうだ、これでいい。起きてしまったことはどうにもならない。これからどうするかを考えた方がいい。仲良くやれると思う。私たちは友達になれると思う。一緒に遊んで、おしゃべりして、コーヒートを飲んだりして。いつか彼女らは故郷のことを思い出に変え、この漆黒の太陽系を第二の故郷とするだろう。

それでいいじゃないか。

何が悪いの？

コミュニケーションって、そういうものじゃない？

それから私は “連星” と一緒に、ぽつりぽつりと他愛もない話をした。緊急時にするんじゃないかもしれないけど、緊急時だからこそしなければいけないと思っただけだ。私たちは皆で衝撃を分かち合い、耐えられる程度に和らげることに成功した。

成功したんだ。たぶん。

やがて誰からともなく口をつぐみ、私もひと眠りすることにした。

宇宙船の床に座り込み、膝を抱き寄せ、顔を埋め、目を閉じる。

そうだ。気持ち落ち着いたら、「連星」を私の惑星に招待しよう。「ことり岩」の天文台や、「こにやんこ岳」のかわいらしい稜線を見せてあげよう。きつと気に入ってくれる。なんならそのまま、私の惑星の衛星軌道に乗せてしまえばいい。そうすれば毎日会える。いつでもすぐおしやべりできるようになる……

幸せな空想のうちに、私は眠りに沈み込んでいった。心地よい感覚だった。夢の中では私は自由だったのだ。

気が付けば、私は籐の椅子に腰かけ、窓から射し込む陽光に目を細めていた。

「またか」

小さく溜息を吐く。過去に2度見た、あの夢だ。窓の外を見上げる。密集した灰色の建物の隙間から覗く、青白く染まった不思議な空。その中心で燦々と輝く白銀色の太陽。なんて強く明るい光だろう。きつとこれが「ハート連星」の故郷の空。彼女たちを育んだ太陽の光。

「そう。これが彼女の世界、その始まりの点」

ふと気が付くと、向かいの椅子に、あの少年のように若い店主が座っていた。彼は組んだ膝の上に頭蓋骨を乗せ、愛おし気にそれを撫でていた。

「物理学者エンリコ・フェルミはこう考えた。ほとんど無限の広さを持つ宇宙には、ほぼ

確實に自分たちとは別の知的生命体が存在するはずだ。なのに彼らが自分たちにコンタクトしてこないのはなぜなのか、とね」

「それは……宇宙が広すぎるから。たとえ生命が誕生しても、恒星間の暗闇を渡り切ることが不可能なほどに」

「そのとおりだ。彼らの宇宙ではしばしばそう説明される。

でも、僕らの宇宙においてはまた別の解答が可能なんだ」
眉をひそめる私に、店主は悪魔めいた微笑みを向ける。

「接触は《融合》。対話は《変質》。異邦人と言葉を交わし触れ合うとき、すでに異邦人は異質な何者かではなくなっている。だからこそ——」

「ひとは、常に、ひとり」

店主はそつと頷いた。

彼は頭蓋骨を撫でる手を止めた。その非人間的に整った美しい顔に、耐えがたい悔恨の色が浮かんでいる。私は目をそらしかけた。見たくなかった。自分の姿を鏡に映して見ている気がした。たまらなくなつて私は口を開いた。

「その骨は……？」

「僕の……友だちさ。一番苦しかった時期に、最も真剣に僕を支えてくれた、かけがえのないひと……」

君は《死》という概念を想像はしても、実際目にしたことはないだろう？ 僕は身をもつて体験した。冷たく、暗く、ただひたすらに孤独……君は17億年もそれに耐えたが、情けないことに僕は、3年ともたなくてね。

僕は外の世界へ希^{こいねが}ってしまつた。生命。存在の意味。在るべきところと、そこに在る自分。そばに寄り添つてくれる伴侶の物質的な実在を、愚かにも求めてしまつたんだ。

その結果、僕は彼の運命を大きく狂わせてしまつた。彼を物言^{ミユ}わぬ死人^トに変え、耐えがたい苦痛を味わわせ、生涯の親友を裏切らせた。僕の身勝手な道に引きずり込んでしまつたんだ。

今でもずっと後悔している。もっと早くにわきまえておくべきだつたんだ。奇しくも彼自身が口癖のように言つていた。

“誰も孤独から逃れることはできない。僕らはいつかみんな死ぬ”——ということ
を」

「……私も？」

「例外は、ない」

私と、彼と。ふたりの溜息が静寂の中にこだました。ずっと、ずっと、胸の中で疼き続けていた病巣。内側から身体をひつかきまわすような痛痒さ。“連星”のふたりと

出会うまで、望遠鏡の中に光の明滅パターンを見出すまで、自分では気付いてさえもいなかった。今なら見える。今なら分かる。私が今、ここで、何を為すべきなのか。

「見えていて」

私は席を立ち、17年練習し続けた通りの笑顔を、一生懸命に作り出した。

「私、なんとかしてみせる」

目が覚めた。

私は立ち上がり、ゆっくりと宇宙船の窓に寄って行った。おだやかに渦を巻く「ハー卜連星」。その「右」と「左」で、声も出さず静かに漂い続けるふたり。私は胸の息を1mLも残さず吐き出し、代わりに新鮮な空気をめいっぱい取り込んだ。背筋を伸ばせ。胸を張れ。

私は、私のやるべきことをしろ！

【聞いて！ 重力井戸から脱出する方法がある！】

「連星」が驚き、目を開く。

【軌道を調整して私の惑星に接触しよう。その引力を利用して加速を行うの。つまり……】

泣かない。泣いてなるものか。

【重力スリングショットだ!!】

(つづく)

06. マリカーヤろうぜ

根気！ はい、得意分野！

私はその日から無数のデータとのつくみあい始めた。まずは現在の正確な位置を求めなければならぬ。宇宙船の中にいちおう持つてきておいた望遠鏡が役に立った。船外活動で太陽の位置、惑星の位置、星座の位置を観測し、そこから「ハート連星」の軌道を算出。

同時に私の惑星についてもデータをとり直した。なぜなら、「連星」の軌道が歪むほど私の質量が大きかったのなら、私の惑星のほうもかなり運動量を失っているに違いないからだ。思った通り、私の惑星はほぼ真円だった元の軌道から大きく外れ、楕円軌道に遷移していた。だがそうと分かっていたら問題はない。計算は可能。

私の計画はこうだ。「ハート連星」の軌道を私の星の軌道と交差させ、至近距離に接近する。このとき「ハート連星」は私の星の引力に引き寄せられて……早い話が私の星に「落ちて」行く。このとき私の星の重力によって「ハート連星」は加速され、移動方向も鋭角にターンさせることができる。

いわゆる「スリングショット効果」。これを利用して太陽からの脱出速度を得る。

もちろん「連星」のふたりとも協力した。彼女たちには推進剤として切り捨てる小惑星を選んでもらった。それほど多くは必要ないけれど、どれも彼女たちにとっては大切な思い出のかけら。どれひとつとっても棄てがたい自分自身の一部。

【しょうがない】

「左」がきつぱりそう言って、嘆く「右」を慰める。

【進むためには犠牲にしなきゃいけないものもある。思い出はまた、いつしよに作る】

【あんたつてさ……ほんと、そういうところ】

【なにが？】

【うるっさいばか】

仲良く寄り添って準備を進めていくふたりが、私にはちよつと眩しすぎて、私は窓から目をそらした。

私はその間、タレットと取っ組み合って、猛烈な勢いで計算を進めていた。ブーストに使う小惑星の発射位置と、その数。軌道遷移のタイミング。必要な質量。太陽系の他の惑星の引力の影響……

ひたすら計画を進行させることに集中して、他には何も考えないようにした。未来など見ないようにした。未来を見れば、行く末を想像すれば、自分自身の堪えがたいエゴ

がまた吹き出してしまふ気がした。

いいんだ。これでいい。彼女たちは旅の続きへ進んでいく。そして私は――

私は、ここに――

【ねえ】

“連星” から声をかけられ、私はびつくりして震え上がった。窓の下からそろそろと顔を出す。美しい紫外線の瞬きが、“連星” の左右の核から私に向けられていた。

【もう計算できた？】

【うん。あとはタイミングを待つだけ】

【そっか。じゃあ、たまにはこっちに来てみない？】

私はしばらく、バカみたいに口を開けっぱなしにしていた。

正気に返った私は大慌てで姿見を探した。なかった。そうだ、家に置いてきてしまった。仕方なく宇宙船の窓の外の宇宙を鏡代わりに睨む。おぼろげに反射する幽霊めいた自分の顔は、とても見れたものじゃない酷い有様で、ぜんぜんかわいくなかった。

私は大慌てで髪型を整え、宇宙服を着こんで外に出た。

宇宙船の外壁を蹴り、私と“連星” の間に広がる虚無の宇宙を、まっすぐに流れていく。不思議な気分。距離感がまるでない。手を伸ばせばすぐにも“連星” に届きそう。

なのに実際にはまだ何千kmも離れている。近づけば近づくほど遠ざかっていく気さえる。自分がどこに居るのかも分からなくなる。

私はこんなところに存在したのか。

細く息を吸い、吐く。

17年——彼女らの基準では17億年。私はずっとこうしていた気がする。何も無い虚空に漂い、遠い遠い星々をひたすら見上げ、空想ばかりに耽る日々。私のそばにあるものは、灰白色レゴリス、漆黒の空、そして科学の諸法則と、私自身。それだけ。

孤独なんて概念、私には縁遠いものであるはずだった。

でも、私は今や、知ってしまった。

宇宙に他人がいることを。

私はひとりではないということ。

知らなければよかった。出会わなければよかった。恐るべき存在感で空に浮かぶこの巨大な「連星」さえなければ、私の距離感が狂うこともなかった。自分と他人との遠さを痛感させられることも、こんな気持ちのまま手がかりのない宇宙空間で泳ごうと試みることもなかった。

そうすれば、私は私のままでいられたのに。

たまたま目を閉じた私の耳に、陽気な歓迎の声が届いた。

「いらつしやーいー！」

気が付くと、私は狭苦しい玄関口に立っていた。驚きのあまり私は言葉を失い立ち尽くす。

そこは鉄筋コンクリート製のワンルーム・マンションの一室らしかった。前に伸びる短い廊下の右手側にはキッチン・スペース。IHのクッキング・プレートと小さなシンク、小型冷蔵庫、綺麗に洗って逆さまに並べられた2人分の食器。左手側にはお風呂とトイレに通じるドア。弾かれたように背後を振り返れば、開放されたドアの向こうに、爽やかな青白い陽光を浴びて輝く住宅街の屋根が見える。

「ほら、遠慮しないで。入っておいでよ」

奥の部屋から呼ぶ声がする。私の吐いた息が宇宙服ヘルメットの内側にかかり、淡く結露した。私はゆつくりと踏み込んでいく。廊下の奥のドアを開ける。

その先の部屋に、ふたりはいた。

床に大股開きであぐらをかいて、だらしなく笑ってる女性。奥の少し乱れたベッドの上に腰かけ、無表情に頬杖ついてる女性。ふたりの眼に見つめられ、私は再び硬直する。あぐらの方の女性が立ち上がり、私の腕に触れた。

「まーまー。上着なんか脱いで。自分の家と思ってくつろいでよ」

「……私の家なんだけど」

「そして私はこの家の飼い猫です。にゃーん」

ベッドに座る女性の膝に転がり込んでいき、撫でてもらって満足げにゴロゴロ言っている。私は吹き出してしまった。もう分かった。ショートヘアのだからしない服装のほうが「左」で、ロングヘアの落ち着いた物腰のほうが「右」だ。

「右」が私の視線に気づき、優しく微笑んでくれる。

「ん。ほんと、遠慮しなくていいよ。そこ、ハンガーあるから」

私は宇宙服を脱いで、壁のフックにハンガーで吊るした。ヘルメットは床の隅にそつと置き、勧められた座布団に正座した。「左」がにやあにやあ言いながら（まだ猫の真似してる……）、奥の棚からゲーム機を持ってきてくれた。

「マリカーやろーぜ！」

私は「左」との勝負にのめり込んだ。なんて素晴らしいゲームだろう！ 高度に洗練されていて、直感的で、しかも人を熱中させる熱気をふんだんに織り込まれている。「右」が淹れてくれた薫り高い紅茶を口にしながら、何度も「左」に挑み、そして敗れた。「左」は一度も手を抜いてくれなかった。

それが嬉しかった。

本棚には「右」のお気に入りの小説が並んでいた。許しをもらって一冊読んだ。涙が止まらない。なんとという切なさ。なんとという温かさ。裏切り、裏切られ、それでも可

愛がらずにいられなかった恋人の死。別れてこそ高まる愛情。行き場のない慟哭。その全てを飲み込む都市という混沌……

ふたりが私の泣き顔を温かく見守っていることに気付き、私は悲鳴を上げて宇宙服のヘルメットを引きかぶった。頭だけ宇宙服になった私がまだ肩を震わせているので、ふたりが左右から背中を撫でてくれた。

「私、知らなかった」

涙を飲み込みながら、私は喘ぐ。

「宇宙にはこんなに面白いものがある。こんなに素敵な物語がある。こんなに高度な科学の体系がある。なのに私は、自分ごときに創った遊びや、物語や、法則を、宇宙でいちばん価値あるものみたいに思ってる。

私は知らなかったの。こんなに宇宙が広いだなんて！」

「（こらこら。私たちの意見は無視か？）」

「左」がコツンと拳で宇宙服のヘルメットを叩く。

「君の持ってきたゲーム、面白かったって言ったよ？」

「あの漫画も本当に素敵だった。嘘じゃない」

「それにひとりで全部考えて、私たちのとこまで来てくれたんでしょ」

「あんなに必死になって、私たちの言葉を勉強してくれた」

「はっきり言うけど、楽しかった」

「感謝してる。それだけは伝えておきたくて」

ちやんと話をしておきたくて。

永遠の別れを迎える前に。

私だってそのつもりだった。

なのに——ヘルメットの中の私はただひたすらに泣くばかりで、せつかく学んだ言葉なんか一単語だって喋れやしなかった。

でも、それでいいんだって気がした。

この広大な宇宙の中で、ひとは、常に、ひとり。

たったひとりのこの私が、全身あますところなく——言葉。

(つづく)

07. 矛盾だらけのフェルミ・ハート

もう語るべきことはほとんど残っていない。何か予想外のトラブルでもあれば良かったのに。太陽の引力が想定より大きすぎたとか。未知の小惑星の衝突で予定の軌道からずれたとか。私が仕掛けた小惑星射出装置が故障で動かなくなっちゃった、とか。そうすればもつと話を続けられたのに。彼女たちと、少しでも長く過ごすことができたのに。

でも、何もなかったんだ。私の計算と計画は完璧で、何もかもが憎らしいくらい順調に進んだ。

小惑星第1弾、射出。これによって“ハート連星”は私の惑星と至近距離で交差する軌道に遷移。

小惑星第2弾を射出して進行方向への加速を行うと同時に、太陽の逆側に対しても第3弾を射出して向心力を増加させ、現在の軌道を維持する。

最後にタイミングを合わせて第4弾、および第5弾。さっきと逆方向の加速によって軌道を固定したまま元の速度に戻す。

準備完了。あとは、待つだけ。

私は宇宙船の座席に身体を沈めたまま、じつと小さな窓を見つめていた。視界の隅から私の惑星がせり上がってくる。漆黒の宇宙にくつきりと浮き出る灰白色レゴリスの地表。あばたのようなクレーターに覆われた不格好な岩石塊。

私はタブレットに、小惑星最終弾の撃ち出しを命令した。

それは、つまり、私のことだ。

私に乗せた宇宙船が、“ハート連星”の裏側に設置された射出装置に押し出される。私の身体と私の船が、ばらばらになるんじゃないかって勢いで揺れ始める。数秒の恐怖のあと、何もかも静かになった。私はくらくらする意識の中で、必死に窓への視線を保ち続けていた。見える。緩やかに回転する宇宙船の窓が、交互に私に見せてくれる。私の惑星、虚ろの宇宙、遠ざかっていく“ハート連星”……

重力スリングショットによる加速に加え、私という大質量を切り離すことで“連星”は十分な速度を確保したはずだ。彼女たちはもう大丈夫。どこまででも飛んでいける。宇宙の果てまでだってたどり着ける。

だからこれでお別れだ。

そこで私は、窓の中に、小刻みに明滅する光を発見した。“ハート連星”のふたりが私の宇宙船に向けて信号を送ってくる。続けて3回。

【3、7、5】

私はシートベルトを大慌てで外し、シートの後ろの道具箱をひっくり返して目的のものを探した。紫外線ビーム発射装置だ。それを窓の手前で抱え、大急ぎで明滅パターンを送信した。

【YES】

“連星”の笑い声が聞こえる気がした。私も宇宙船の中で笑っていた。私達の間でだけ通じるちよつとしたいたずら。つまりそれは、私達の思い出。

【忘れないよ】

唇を震わせる私の目に、“連星”からの最後のメッセージが届く。

【友達になれてよかった。またね！】

それで、おしまい。

無音の宇宙に、私の宇宙船が流れていく。

“連星”が遠ざかり、点のように小さくなって、消える。

私は座席に戻った。

穏やかに目を閉じた私を乗せたまま、宇宙船は私の惑星へとぐんぐん引き寄せられていった。定規で引いたように真つ直ぐな直線を描き、宇宙船が“うさちゃんクレーター”に墜落した。灰白色レゴリスの粉塵が盛大に巻き上げられたが、起きた変化といえ

ば、まあその程度のものだった。

私は夢を見た。そう、おなじみになったあの夢だ。陽光差す雑貨店の窓際で、私は籐の椅子から立ち上がる。向かいの席で頭蓋骨を撫でていた店主の手が止まる。はじめいけ好かなく思えた彼の眼が、今は不思議に柔らかさを帯びて見える。

「ごめんなさい。いろいろご迷惑、かけました」

「いいんだ。きつとこれは、必要な出会いだったのだから」

きよとんとしている私に、店主は苦笑して見せた。明らかに彼も、彼自身が口走っていることを不審がっているふうだった。

「これは非常に奇妙なことだ。僕は君の名前を知っている。僕だけじゃない、この世界の誰もかも知らない者はないんだ。だが、君だけが知らない。つまり、僕が君の名付け親になってしまうことになる。」

「白痴の語り手」。おそらく世界はここから始まった。僕が過去だと思っている物は、実のところまだ存在していない。未来がまだここにはないのと同等か、あるいはそれ以上にね。ひよつとしたらこれこそが僕の役目だったのかも。そのためにこそ、僕は選ばれたのかもしれない」

「何の話？」

「いずれ分かるさ。その時こそ、新たな物語が幕を開けるんだ」

首を傾げる私に微笑みを向け、店主はゆっくりと立ち上がった。私のために店のドアを開いてくれた。私は出口の前に立つ。その向こうに見えるのは長方形に切り取られた満天の星空。寂しさと静けさと、ほんのちよっぴりの温もりが宿る宇宙。

「そうだ。最後にひとつ、アドバイスをおこうか。」

天文台を作ってみてはどうか？　今まで使っていたものよりさらに解像度の高い大型の望遠鏡を備えていて、紅茶でも飲みながらじっくり腰を据えて観測し続けられるような、本格的なものを」

「天体観測が面白いのはとっくに知ってるよ。どうして今さら？」

「君が思っているよりもっと面白いからさ」

ふうん。なんとなく癪な言い方だけど、悪くないアイデアかもしれない。

私は深呼吸して、覚悟を決め、星空の中へと一步を踏み出した。お別れなんて言わない。「連星」のふたりにも、この店主にも、他のどんなものにも。今の私には想像できる。この宇宙のあらゆる場所に存在するひとつひとつのことが。思いを馳せる時、私は、そのひとつひとつのもので存在している。いつだってそばにいられる。

帰ろう。私は私の星へ。宇宙全てを見回せる、あの澄み切った黒い空の下へ！

それから365日かけて、私は天文台を作った。

開閉可能なドーム屋根の中に、超大型の光学望遠鏡を備えた本格的なやつ。シートはふかふか。仮眠用のベッドもあり。隣接した給湯室には、もちろんコーヒーのサイフォンが置いてある。

やつぱり私は、紅茶よりコーヒーがいい。

その天文台から観測をはじめた数日後、私はあの店主が言っていた「もつと面白い」の意味を知ることになった。星は光るか光らないかだ。私はそう思っていた。

私は間違っていた。星は明滅していた。この宇宙に散りばめられたほとんど無限の星々が、ひとつひとつ異なるパターンで輝いていたのだ。私は唾然とした。言葉だ。かつて「ハート連星」が私に見せてくれたのと同様の、いや、ひとりひとり全く異なる、無数の言葉が私の頭上で煌めいていたのだ。

17億年ずっと！ 私は気付いてもいなかった！

私、なんてバカなんだろう。

この宇宙に私ひとりだったわけじゃない。宇宙の隣人たちは姿を見せないどころか、はじめからずっとそこにいたんだ。絶え間なくおしゃべりし続けていたんだ。ただ私の望遠鏡の解像度が足りなかったただけだったんだ！

次に私がしたことは想像がつくだらう。そう、翻訳に取り掛かったのだ。今度は

ちよつと大変だった。なにしろ数があまりにも多い。ざつと見渡しただけでも70億ほどの星々が、それぞれ別の言語で好き勝手にしゃべっているのだ。全部翻訳し終えるにはどれほどの時間がかかるか分からない。でもたぶん、だいじょうぶ。1件に平均100日ずつかけたって、19億年——私の単位で19年もあれば片が付く。それなりに現実的だ。

根氣、得意分野だからね。

それから3万日ほど経ったころ、私は不意に思いついて、“うさちゃんクレーター”の真ん中に灯台を建てた。てっぺんから強烈な光を放ち、銀河の果てからでも充分見えるくらいに明るい灯台だ。

星々の言葉を読むのに飽き足らなくなった私は、自分の光を送り出してみることにしたのだ。私が読み取った星々の物語を、私なりの言葉でつづり、漆黒の宇宙へと送り出す。誰の眼にも入らないかもしれない。無数の星々に紛れて気付かれないかもしれない。あるいは仮に見てくれたとしても、つまらないと一蹴されて終わるだけかもしれない。

でも、そんなこと問題じゃない。

私はここで生きている。観察と、思考。迷いと、悩み。それにちよつぴりの幸せ。私
の世界の本来のかたち。その中から自然に湧き出されたひとつの輝き。

私はただ、それを追うのみ。

なんてね。格好つけちゃったし、7割くらいは本気だ。でも残りの3割くらい下心もある。誰かに認めてもらいたいな、とか。誰かというか、“ハート連星”のふたりに読んでもらえたらいいな、とか。私の心は矛盾だらけだ。ここまで開けつびろげに書いてきたけれど、正直ちよつと恥ずかしいんだよ。

だからこの物語のことは、あなたと私、ふたりだけの——永遠のひみつ。

T H E
E N D .